

NAI Newsletter No. 7 March 1999

# 人類学研究所 通信

第7号

Nanzan Anthropological Institute

南山大学人類学研究所

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18

Tel. 052-832-3111 (580)

1999年3月20日発行

## 「挨拶」

クネヒト・ペトロ

「厄年」とは不思議なものである。それを気にする人がいるとしても、自分だけと無関係で、その年を過ぎてもまだまだ相変わらず力一杯活動できるのではないかと思うであろう。しかし、実際にその年齢を通過し、振り返って見ると、矢張り様々な様子が徐々に変わりつつ、ペースが減速してきたに気が付く。ところが、その反面、時間が流れるスピードは益々加速する感が強い。先がみえてきたというのは人生後半の「世界観」だと言われて仕方がないと思うが、その「先」までにやるべき仕事をやりこなすのにどうも時間が足りない感が強く、少々慌て気味になりがちである。

昨年の「通信」を発送した際、今度はもう少し時間的余裕をもって準備できると思った。甘すぎる見方だったと今になって分かってきた。予測したよりも変化に富んで、慌ただしい一年であった。しかし、吉原和男先生担当の「アジア移民のエスニシティと宗教」研究会は順調に進んでいるのは当研究所にとって重要なことである。尚、今回も又二人の先生方に特別講演していただいた。吉野耕作氏は「マレーシアにおけるマルチ・エスニシティ」という題で話された。自ら移民として豊富な経験をもっているハルミ・ベフ氏は日本人の世界的拡散と日本のグローバリゼーションに関して我々の視野を広めて下さった。その講演の原稿を今回の「通信」に発表するためにご提出下さったベフ先生に感謝を表したい。

(南山大学人類学研究所長・南山大学教授)

## 目次

「挨拶」	クネヒト・ペトロ	1	人類学研究所 所長日誌	6
日本のグローバル化と人的拡散			研究会・講演会	9
	別府春海	2	Asian Folklore Studies	10

## ◆ 研究報告 ◆

## 日本のグローバル化と人的拡散

南山大学人類学研究所 第6期 第2年度第1回研究会 (1998年10月17日)

別府春海

## 序

欧米でグローバリゼーションの理論が本格的に打ち出されるのは、約10年前、1980年代の終わり頃からである。大きな例外は経済学者 Immanuel Wallerstein の経済的な意味でのグローバリゼーション理論であるが、ここでとり上げているのは文化及び社会面のグローバリゼーションの理論で、Roland Robertson, Ulf Hannerz, Jonathan Friedman, Peter Beyer, John Meyer, Malcolm Waters, Mike Featherstone, Anthony Giddens などが代表論者である。Peter Beyer は Religion and Globalization という題で、宗教のグローバリゼーションについて書いているが、ここで採り上げているのは、主に世界宗教といわれているキリスト教、イスラーム、仏教などである。もう一つ Irving Hexham and Karla Poewe 著の New Religions as Global Cultures はいわゆる新宗教、それも欧米から発生した新宗教だけではなくて、それ以外のいろんな新宗教等も採り上げているところに斬新さがある。

欧米のグローバリゼーション論者の殆どは、グローバリゼーションというのが、15世紀位に始まったとしている。これは「ヨーロッパのグローバリゼーション」が15世紀に始まったということである。

14世紀の後半から15世紀と言え、いわゆる大航海時代である。大発見時代とも言われ、ヴァスコ・ダ・ガマやコロンブスが活躍した時代で、彼ら探検家がアフリカ、新大陸、アジアを「発見」し、その後商人達が各地に出かけ、またキリスト教宣教師が、世界中に伝道活動を始める。そこで既にグローバルな人的拡散が始まり、商人・

宣教師以外のヨーロッパ人も移民として拡散し、現地に落ち着き、子孫を残し始めた。

ヨーロッパ諸国家は発見だけではその欲望はおさまらない。次には占領、必要あれば武力的な占領がある。場合によっては、「国際条約」を結びながら究極的にはアジア・アフリカ又、新大陸を自分の領土にしていく。そしてそこで植民地ができ、搾取の構図ができてくる。

Immanuel Wallerstein のグローバリゼーション論は、資本の蓄積をひたすら目的にしている。植民地化は資本主義と合いまってヨーロッパの資本蓄積に貢献してきた。そして日本もおくればせながら19世紀に入って資本主義を導入し、植民地を獲得してヨーロッパの真似をすることになる。ここで日本人のグローバルな拡散を議論する前に「日系人」の概念的考察を簡単にしたい。

## 「日系人の定義」

「日系人」といえば北米、南米の移民、及びその子孫と思うのが一般だが、ここでは、そういう人達も含みながら、しかし、それ以外の海外に住む日本人、日系人も広く含めた意味で、「日系人」という言葉を使うことにする。

この使い方はむしろ例外的だろう。日系人研究者間の「日系人」の定義は狭い意味の日系人である。つまり戦前、南米、北米に定住した移民達、及び、その子孫達を指して日系人といっている。

だが、実際一世達が戦前南北アメリカに行った時に、一生そこで定住、永住し骨を埋めようと思っていた人は極少数だった。殆どは、一儲けて日本に帰ることを意図していた「出稼ぎ」

だった。だが、種々の事情で居残ってしまったケースが大多数である。

反面、戦後海外に派遣された企業駐在員は、日系人ではないとは公言しているが、彼らの中には海外生活に魅力を感じ、会社を辞職し海外に居残る者も多い。彼らは「日系」ではないのかという問題になると実際この定義というものが非常にファジーで、両義的になってくる。定住すれば日系、でなければ日系でない、という結果論的定義は有効ではない。そのため私は定義を最拡大し、短期、長期を問わず海外に住む日本人及びその子孫を日系と呼ぶ。

### 日本の初期グローバリゼーション

議論をもどそう。欧米のグローバリゼーションは、15世紀後半から16世紀にかけて始まったことを述べた。16世紀といえば、日本では室町、安土桃山時代であり御朱印船が貿易のため東アジア、東南アジアを文字通り奔走し、南蛮文化を日本に搬入していた時である。日本の文化も東アジア、東南アジアに広く伝えられていた。和寇と言われる海賊が東アジアに広く出沒していたことも日本のグローバリゼーションの一役を果たしていたといえよう。

これに伴って人的拡散は確実に進捗し、東南アジア各地に日本町が成立した。山田長政で有名な、当時のシャムのアユタヤには、何千人という日本人が住んでいたと言われている。また、ヴェトナムの中心部の古都、ホイアンの近くに、その昔日本人町があり、約3000人日本人が住んでいたと言われている。その他、東南アジア各地に日本人町が設立され、当時既に日本のグローバリゼーションは始まっていたといえよう。

ところが徳川時代に鎖国のため日本のグローバリゼーションが中断する。鎖国がなければ、日本のグローバリゼーションが続き、恐らく日本は東南アジアからインドの方に進出し、インド洋あたりでヨーロッパと対決していただろう。しかし歴史はヨーロッパに味方をした。

徳川末期に鎖国が解かれ、明治になり日本のグローバリゼーションが本格的に再開始する。

しかしその時点では、日本はヨーロッパに完全に遅れをとってしまった。250年の間にヨーロッパ諸国はアフリカ、アメリカ、アジアを殆ど席捲してしまった。のみならず、ヨーロッパでは資本主義が発達し、初期工業資本主義のもとにその資本蓄積体制をつくり上げていた。日本は早急に、ヨーロッパのグローバリゼーションの手段を導入することになる。まず工業資本主義を導入し、資本蓄積のインフラを作っていく。

### 明治期以降の人的拡散

人的拡散はグローバリゼーションの一環としてその当初からはじまる。明治元年にはすでに「元年者」といわれる契約移民がハワイに出ていき、その後北アメリカや、南アメリカにも、日本人は出ていくようになる。

「ヨーロッパ型グローバリゼーション」では、植民地を獲得し、搾取するという非常に重要な手段がある。脱亜欧入せんとする日本は急ぎ台湾、朝鮮半島、樺太、中国の東北地方、ミクロネシア等の植民地を獲得し、そこへ移民を送り出していく。移民を出すことは、一つには植民地を日本化にしていく手段でもあり、又同時に日本内地の人口問題の解決にも貢献していく。

日本の場合、人的拡散としては南北アメリカを先づ念頭に浮べるが、南アメリカへの移民が始ったのは、19世紀の末期である。2000年を今後にして南米諸国では移民100年祭が行われている。しかしその頃には既に日本人は、東南アジアに出て行っていた。フィリピンでは道路建築のために日本から多くの労働者が行き、その中で日本に帰った者もあるが、現地の女性と結婚し、定居した者も多い。

第一次大戦の結果、日本はミクロネシアの委任統治国となりミクロネシアを植民地化するため下層官僚が現地に派遣され駐在することになる。また、労働者が出稼ぎ移民として進出し、多くは現地人と結婚し、今でも居残り、その結果日本名をもった子孫が多く居住している。日本人の姓を持った大統領が生れたのは、ペルーでなくミクロネシアが嚆矢である。

日本のグローバリゼーションは当然ながら、アジア・東南アジアにおいてヨーロッパ諸国との植民地の取り合いになり、日本はその争奪戦に惨敗する。日本のグローバリゼーションの一環としての人的拡散ははた又、挫折することになる。終戦に於いて日本人は、アジア諸国から全員日本に帰ることになる。敗戦により100%復員したことになるが、実は復員しなかった日本人は多いがその数は全く分っていない。中国に関しては、メディアで「残留孤児」という名前を取り上げているので比較的知られているが、アジアの他の地区に於いても日系人が残っているということは、殆ど知られていない。

フィリピンでは在住日本人が、戦時中上陸した日本軍に軍属として徴兵され、日本軍と運命を共にすることになる。日本軍は現地人に残虐行為を行ったが軍人は復員し報復を免れるが、復員できなかった在住日本人は冤罪を問われ、中には奥地に逃れ、中には名前を変えて報復から身を守った人もいた。フィリピンであったことは、他国でもあり、タイでは戦前からの定住者に加え、日本軍の逃亡兵が多くいたことが知られている。インドネシアでも同様のことがあった。このように、戦前の日本のグローバリゼーションの名残が敗戦でほぼ中断しながら、しかし戦後まで続いていたということを我々は認めなければならない。

### 戦後の人的拡散

この連続性の意義をここで問う必要がある。戦後1960年代になって、日本の企業が海外に進出し、各国に橋頭堡をつくることになる。現地に出張所、支所、合弁子会社等を設置し、販売網を作っていくことになるが、その過程で利用されたのが現地で生き残っていた日系人である。例えば、マレーシアの例では日本の派遣駐在員が先ず頼ったのは、現地の言葉ができ、現地の事情に詳しい残留日系人であり、そのアドバイスに従って、現地の出張所の所在地を撰び住宅を購入し、残留日系人は派遣駐在員の現地適応に少なからぬ役割を果たした。

少し事情は違うが、アメリカでも同様なことがあった。アメリカに進出した日本企業は、戦前からの移民、その子孫の日系2世・3世に現地適応のため依存したし、今もその傾向がある。アメリカ西海岸では何万という日系人が在住し、車や電気製品のような日本製消費財を先ず購入し、日本企業の市場シェア拡大に寄与した。

1970年代には駐在員及びその家族を中心にした自己完結的日系社会が歴然として世界各地に成立し、アジア、ヨーロッパ、北米では人口数千ないし数万の日系社会がみられるようになる。その時点では駐在員日系社会と以前からの日系社会は微妙に関連しながら別々の存在となる。駐在員も初期ではその数も少なく、日系人を含む現地人との交流、現地社会への適応が必要とされたが、その数が、数千人に達した時点ではそのような適応が殆ど必要でなくなる。日本がグローバル化すればするほど、日本人は国際化しなくなる、という逆現象が起こってくる。

戦後日本人の拡散にはいくつかのタイプがある。企業駐在員とその家族はその一つだが、もう一つの例が、戦争直後の戦争花嫁と言われる女性たちと、60年代以降の国際結婚によって日本を離れる女性たちである。この両者の結婚相手は大多数が欧米人である。この二つのグループはその内容が少し違うが、どちらの場合も結局日本を捨てて、夫の国に行くことになる。これらの女性は日系人人口の密集するところには普通居住しない。彼女らは夫の郷里あるいは夫の職場の所在地へ行き、それは必ずしも日系人の集結するところではない。

戦後口べらしの政策として、日本政府は大々的に移民事業を始め、北アメリカそして南アメリカへ移民を送り出した。彼ら戦後移民は戦前からの日系人社会とも又戦後の駐在員社会とも異った社会を形成していく。戦後の移民達は俗に「新一世」と呼ばれ、彼らは自分たちだけのアイデンティティーをもち、戦前の日系社会と交渉はあるが、一線を画して生活している。

1970年代から海外に出るもう一つのタイプの日本人がある。それを私は「棄国組」と呼んで

いる。当然国際結婚の人達も日本を捨てたと書いてもいいが、70年代以降では、殊に未婚の女性で狭い日本の社会、又性差別のため自分の目的の達せられない日本社会を見捨て、外国へ飛び出していく女性が増えてくる。女性に限らず男性でも競争のはげしい、就業時間の長い企業生活を捨て、海外でやりなおす男性も意外に多いことをここに銘記すべきである。

このような棄国組はどのようなキャリアを海外でもつのだろうか。彼らは一般に進学指向が強く、外国で大学教育を受け資格をとる。場合によっては大学院で、修士、Ph.D.を取り、就職する。そういった場合、必ずしも日系人、日系社会のあるところに就職できるわけではない。しかし、自分の意向としては、日本を捨ててはいても、やはり日本に対する愛着は捨ててはいないので日系人が集中している地域に、移って行く傾向がある。

ここでもう一つ付け加えるべきことは、脱出組は日本に批判的であるにもかかわらず生業に自個の文化的資本に依存している。つまり、結局日本関係の仕事をしている場合が殆んどだということである。工科のような、日本と関係のない職業でも就職すれば日本関係の部門に配置される。文科系の場合は殊にそのような傾向が強い。例えば日本では米英文学専攻であっても、アメリカの大学では、到底アメリカ人と競争して勝てない。むしろ手っ取り早いのは日本文学ないし日本学で勝負をし学位をとる。就職はおのずから日本学関係になる。経済学、法学のような実務的な学問であっても就職では日本関連の部所或は日系人相手の職業につくことになる。

高等教育による資格を海外で取らない日本人の場合、尚さら就職範囲は日本関係に狭まれることになる。駐在員相手の旅行社、日本書籍店、日本料理店、日本人観光客相手の土産品店などが主な就職先となる。或は日本企業の現地社員として採用される。このように日本を棄てた棄国組も、殆ど結局、日本という文化的資本を利用して生活し、究極には日本の企業のグローバル化に何らかの形で寄与していることにな

る。日本に対する嫌悪が海外にとび出させたのだが、結局は日本の役に立つことで身を立てるという、逆説的な結果が出てきている。

## 結語

海外における日系人及びその社会の主だったものとして、(1)戦前からの日系社会、(2)「新一世」と呼ばれる戦後の移民社会、(3)企業駐在員及びその家族の社会(4)海外に移住した戦争花嫁、国際結婚の女性たちと、最後に(5)棄国組について簡単に述べた。これらの海外に住む日系人は日本のグローバリゼーションの担い手でもあればその落し子でもある。

戦前戦後の移民は明治以来の国家のグローバリゼーション政策によるところが大きい。国家はその政策を「グローバリゼーション」と打って出てはいないが、結果的に見れば、日本は16世紀以来グローバル化を断続的ではあるが、続けてきた。そして、明治以来の国家の政策の大きな部分は究極的には日本のグローバリゼーションを促進している。移民はまさにその落し子である。駐在員の場合明らかに日本のグローバリゼーションの担い手には違いないが、日本のグローバル化が進むにつれ更に多くの駐在員が必要とされるところに「落し子」的要因がある。

戦争花嫁も日本のグローバル化が敗戦をもたらし、敗戦の苦渋が女性をして占領軍兵士を結婚相手に選ばせたといつてよかろう。国際結婚を撰んだ女性については、日本のグローバリゼーションが日本人女性の海外進出を可能にし、又日本のグローバリゼーションと相俟って、欧米のグローバリゼーションが欧米人を多数日本にもたらし、国際結婚を可能にした。

最後に棄国組に関しては、日本の経済的グローバリゼーションの成果が、彼らを海外で教育を受け、生活をさせる経済的余裕を与え、海外移住を可能にさせた。

このように日本のグローバリゼーションは種々の日系社会を海外に生んだが、その海外日系人は日本のグローバリゼーションの助長に寄与し、かくして、日本のグローバリゼーションと

海外日系人とは循環的に相互作用していることを記してこの小論を終えたい。

(べふ・はるみ 京都文京大学人間学研究所長)

### ◆ 人類学研究所 所長日誌 ◆

(1998.1月～12月)

記録: クネヒト・ペトロ

1/14(水) 南山大学の三研究所の所長会議で新年がスタートした。人事計画などについての打ち合わせであった。

1/23(金) クネヒト研究所員は東京へ出張し、東京大学駒場キャンパスで開かれた、Chicago大学のチャールズ・F・グレイ人類学特別教授 Marshall D. Sahlins の講演会とその後の歓迎会に出席した。「人類学的啓蒙とは何かー 20世紀の教順について」の講演では教授が従来の人類学による文化観の短所を鋭く指摘した。「我々が如何に間違っていたかに目を覚ますところで人類学的啓蒙が始まる」という教授の見解は印象的であった。

1/24(土)～25(日)「アジア移民のエスニシティと宗教」の第三回研究会が開かれた。土曜日に、宮城教育大学助教授川上郁雄氏の発表「在日ベトナム人の宗教と生活世界」に続いて、阪南大学教授前山隆氏を特別講師に迎え、「エスニシティを祀るーブラジル日系人の場合」という題で講演していただいた。翌日、名古屋大学大学院博士課程の王維氏が「日本華僑の祭祀・芸能ー長崎を中心に、類型化の試み」の題で調査研究の成果を発表し、吉原和男研究所員がコメントーターを勤めた。

2/6(金) 岐阜県教育センターで集まっていた高校教員の研修会へクネヒト研究所員が講師として招かれて「教育と文化」というテーマで講演した。

2/17(火) 人類学科の主催で、山田隆治、倉田

勇両教授の送別会が催された。二人の教授と同じ頃吉原和男研究所員も退職することが決まったので、三人の送別会となった。

2/18(水) 宗教団体の新法が決まったため、伊勢の神宮徴古館農業館が在庫物調査を行ったので、クネヒト研究所員は閲覧の可能性を待望していた「伊勢参詣曼荼羅」を見学するために急に出張した。ついでに、外宮の裏山、高倉山の上の古墳跡、「天の岩戸」も見せてもらったので中世・近世の伊勢参りの風景を垣間見ることができた。

2/21(土) 東京大学の大貫良夫教授の退官記念講演に出席するため、クネヒト研究所員は上京した。講演は大貫教授が最初から最後まで共にして来た東大のアンデス調査の極めて個人色の濃い歴史物語であった。懇親会の時に披露されたアンデス地方の音楽と先生自らの踊りはこの日の相応しい締めくりであった。

2/27(金) 南山宗教文化研究所が開いた送別会で、六年間人類学研究所発行の雑誌、Asian Folklore Studies のコピー・エディターを勤めて下さった Tom Kirchner 氏とちょっと淋しい別れを告げた。長い間、本当にご苦労様であった。

3/5(木) 約二週間程の現地調査を行なう目的でクネヒト研究所員は東北へ出発したが、この日東京に立ち寄って、大学院生時代に教えていただいた東洋文化研究所の末成道男教授の退官記念講演に出席した。この晩、珍しく雪が降って、少し積もった。調査の主な目標は、口寄せ儀礼の録音テープ起こしと、戦後村に行なわれた米生産の政策に関する資料蒐集であった。

3/30(月) 今月 31 日付けで人類学研究所を去り、母校の慶応義塾大学に移る吉原和男助教

授のためにささやかな送別会を催した。二年間だけの研究所所属だったが、研究所を離れても、「アジア移民のエスニシティと宗教」研究会を引き続き担当していただくことになったので、今後とも時々来所していただけるので研究会が計画通り続く見込みである。

4/1(水) 研究所の研究スタッフは一人だけになって、新年度をスタートした。今日、新しいコピー・エディター、Clark Chilson 氏が就任した。若い彼のエネルギーは大いに期待されている。

4/5(日) 東京大学駒場キャンパスで開催された日本民族学会の第一回評議員会に中部地区の評議員の一人として出席したクネヒト研究所員は中部地区の理事として選出された。

4/13(月) 少し遅れたが新コピー・エディターの Clark Chilson 氏を迎え、歓迎会を開いた。彼は予定より半年以上に発行が遅れている Asian Folklore Studies にとって大切な人材である。

4/19(日) 日本民族学会の新会長の松園万亀雄教授を中心に、東大駒場キャンパスで第一回理事会が開かれた。理事会に課せられた任務が多くて、殆ど毎月会合が開かれる見通しである。

5/9(土) 人類学研究所主催公開講演の新シリーズのテーマは「開発と原住民文化」に決まった。第一回の講演を広島市立大学の川田順造教授にいただいた。「開発における特殊と普遍—「技術文化」の類型化の試」の演題と講師の知名度は 54 名の大聴衆を寄せたが、先生の多忙のため、講演後の質問や議論時間が短くて、残念であった。

5/15(金) 名古屋のニット組合に呼ばれて、クネヒト研究所員は「Globalization 中の個別文化」について講演した。衣服の卸商売をしている組合員の普段の考え方から少しかけ離れたような話であったという感想であった。

6/1(月) 本日から University of Notre Dame, South Bend, Indiana の Michael C. Brownstein 助教授が研究所で夏の一部を過ごすことになっ

た。書評原稿を準備して、Asian Folklore Studies と協力しながら、日本の劇の研究と邦楽の練習に励んでいる。7月16日に帰国する予定である。

6/12(金) 昨年の秋から研究所の客員研究員 Karen S. Smyers 女史は新しい研究分野を開発して、豊穰・性・性崇拜に関する観念、行事や祭りなどを調査し、研究してきた。この研究の暫定的な成果をきょう彼女の得意なスライド付きの話で発表した。発表に対してかなりの議論があったが、ビールとおつまみ付きの話は研究所で初めての出来事であった。無論大好評であった。

6/13(土) シリーズ「開発と原住民文化」の第二回講演を北海道ウタリ総合センターの津田命子女史にいただいた。津田氏は「祖父母の時代と私の経験」という題で、アイヌである自分の経験と活動について心を込めて、感動的な話をしてくださった。35名が出席してくれた。初めて飛行機に乗って、初めて中部日本へ出掛けた津田さんは上空から日本を眺めたかったがあいにくの雨の日になってしまった。また、自然の材料を使ってサラニブ等を製造している津田さんはモウソウ竹に触れたかったが、その機会がなくて残念であった。

6/20(土) 研究所の新しいコピー・エディター、Clark Chilson 氏は Second Annual Asian Studies Conference Japan で "Kuya in History and Historiography" というテーマで研究の中間報告を行なった。

6/22(月) 客員研究所員の Karen A. Smyers 女史の滞在期間が終わりに近づいた所でちょっとした送別会をした。学術振興会の fellowship のお陰で彼女と共に我々も様々な方面において刺激的な期間を過ごす機会を得た。

6/23(火) 名瀬区国語教育研究会の招きで当会の総会においてクネヒト研究所員は「《文化》を考え、《他者》を捨える」という題で講演した。

7/19(日) 日本民族学会発行の英文雑誌編集

担当の新編集委員会の第一回編集会に出席するためクネヒト研究所員は東京へ出張した。本日付けでクネヒト研究所員は財団法人リトルワールドの評議員として選出された。任期は3年間である。

9/30(水) クネヒト研究所員は米山奨学生学友会(愛知)の会長としてナゴヤキャッスルで開かれたクラブ米山奨学委員長会議に出席し、卓話した。

10/7(水) 予算案を練るために所員会議を開いた。クネヒト第一種研究所員と早川正一第二種研究所員が出席した。

10/17(土)～18(日)「アジア移民のエスニシティと宗教」の研究会が行なわれた。京都文京大学人間学研究所長別府春海教授を客員講師として迎え、「グローバル化する日本の人的拡散」という題で公開講演していただいた。研究会では芹澤知広が「ベトナム・ホーチミン市の華人カトリック教会に関する調査研究: 背景の紹介と中間報告」、宮原暁が「《もの》の移動とエスニシティー: フィリピン・個人社会における《富》と《福》の再分配をめぐって」それぞれ発表した。

10/22(木) Oxford 大学、St. Anthony's College の Fellow である Roger Goodman 氏を迎え、懇話会を催した。日本の養護施設について "What happens to Japanese children when their parents cannot look after them?: An examination of Japanese yugoshisetsu (children's home)" の題で進行中の調査成果を発表していただいた。

10/23(金) Madras 大学の S. Subbiah 教授は国立民族博物館の杉本良男助教授と共に来所した。Subbiah 教授は Madras 大学で設立される予定の Center for Japanese Studies and Research のことを説明し、協力を求めた。

11/4(木)～6(金) 国立民族学博物館で開かれた「宗教と文明化の20世紀」のシンポジウムにクネヒト研究所員がコメンテーターとして参加した。

宗教の暴力性が中心的なテーマのシンポジウムは大変示唆的であった。

11/7(土) シリーズ「開発と原住民文化」の第三回公開講演を催し、早稲田大学の菊地靖教授に話していただいた。開発の現実に詳しい菊地氏のテーマ「開発と文化—21世紀への課題と展望」はおおきな反応を呼んだ。

11/13(金) Bangladesh の Dhaka 大学から現在金沢大学で研究中の Saifur Rashid 氏は来所した。氏は金沢大学で日本学術振興会の論博 Fellow として鹿野勝彦教授の指導で論文準備中である。

11/21(土)～22(日) 第二回「アジア移民のエスニシティと宗教」研究会が開かれた。土曜日に村上忠良が「タイ国北部パキスタン系移民(パターン人)のエスニシティと宗教」と谷口裕久が「タイ北部の雲南系漢人にみる移住と婚姻」の研究を発表した。翌日の日曜日に田沼幸子が「似ていても「他なるもの」: 在東京ビルマ人の他者境界について」または、三尾裕子が「台湾ナショナリズムについての一考察—廟宇を通じた两岸交流を契機に—」それぞれ発表した。

11/25(木) 岐阜県高等学校・特殊教育諸学校の校長研修会で(大垣フォーラム・ホテル)クネヒト研究所員は「文化と教育」という題で講演した。

12/5(土) シリーズ「開発と原住民文化」の最終会で相山女学園大学の杉藤重信教授が「アボリジニーらしさと開発: オーストラリア・アーネムランドの現在」のテーマについて話した。

12/19(土)～20(日)「アジア移民のエスニシティと宗教」研究会の年内最後の集まりを客員講師として東京大学の吉野耕作教授が飾った。「マレーシアのマルチ・エスニシティ」という刺激的講演して下さった。それを囲むような形で土曜日に韓景旭氏が「中国朝鮮族とキリスト教」と日曜日に李仁子と鈴木健太郎が共同で「在日韓国・朝鮮人の宗教生活—先行研究の検討と在日の帰郷葬送」を発表した。その日にクネヒト研究所員

は本研究会担当の吉原和男助教授と来年度の出版計画とそれに関連して原稿の提出締め切り

について相談した。締め切りを来年(1999年)9月末日に決め、出版を目指して出版社を捜すことに合意した。

## ◆ 研究会 ◆

第6期研究計画(特定研究)

「アジア移民のエスニシティと宗教」

### 第1回研究会

日時: 1998年10月17-18日

場所: 研究所1階会議室

報告:

第1日(17日)

- ・ 芹澤知広氏「ベトナム・ホーチミン市の華人カトリック教会に関する調査研究: 背景の紹介と中間報告」

・ コメンテーター: 宮原暁氏

・ 特別講演: 別府春海氏

(京都文京大学教授)

「グローバル化する日本の人的拡散」

第2日(18日)

- ・ 宮原暁氏「《もの》の移動とエスニシティー: フィリピン・咱人社会における《富》と《福》の再分配をめぐる」

・ コメンテーター: 芹澤知広氏

### 第2回研究会

日時: 1998年11月21-22日

場所: 研究所1階会議室

報告:

第1日(21日)

・ 村上忠良氏「タイ国北部、パキスタン系移民(パターン人)のエスニシティと宗教」

・ コメンテーター: 谷口裕久氏

・ 谷口裕久氏「タイ北部の雲南系漢人にみる移住と婚姻」

・ コメンテーター: 村上忠良氏

第2日(22日)

・ 三尾裕子氏「台湾ナショナリズムについての一考察—廟宇を通じた兩岸交流を契機に」

・ コメンテーター: 吉原和男氏

・ 田沼幸子氏「似ていても「他なるもの」: 在京ビルマ人の他者境界について」

・ コメンテーター: 川上郁雄氏

### 第3回研究会

日時: 1998年12月19-20日

場所: 研究所1階会議室

報告:

第1日(19日)

・ 韓景旭氏「中国朝鮮族とキリスト教」

・ コメンテーター: 李仁子氏

・ 特別講演: 吉野耕作氏(東京大学教授)

「マレーシアのマルチ・エスニシティ」

第2日(20日)

・ 李仁子、鈴木健太郎氏「在日韓国・朝鮮人の宗教生活—先行研究の検討と在日の帰郷葬送」

・ コメンテーター: 韓景旭、熊田一雄氏

## ◆ 講演会: シリーズ「開発と原住民文化」 ◆

### 第1回講演会

日時: 1998年5月9日(土)

講師: 川田順造氏(広島市立大学)

演題: 「開発における特殊と普遍—「技術文

化」の類型化の試]

講師:菊地靖氏(早稲田大学)

## 第2回講演会

演題:「開発と文化ー 21世紀への課題と展望」

日時:1998年6月13日(土)

講師:津田命子氏

(北海道立ウタリ総合センター)

演題:「祖父母の時代と私の経験」

## 第4回講演会

日時:1997年12月5日(土)

講師:杉藤重信氏(相山女学園大学)

演題:「アボリジニーらしさと開発:オーストラリア・アーネムランドの現在」

## 第3回講演会

日時:1998年11月8日(土)

## ASIAN FOLKLORE STUDIES

## ◆ VOLUME LVI-2(1997) ◆

## ARTICLES

*Special Issue: "The Divine Female in Indonesia"*

The Goddess Durga in the East-Javanese Period (H. Santiko)

Offerings to Durga and Pretiwi in Bali (F. Brinkgreve)

*Sanghang-pangan* for the Goddess: Offerings to Sang Hyang Bathari Durga and Nyai Lara Kidul (C. Brakel)

Tārā and Nyai Lara Kidul: Images of the Divine Feminine in Java (R. E. Jordaan)

Kanjeng Ratu Kindul: the Second Divine Spouse of the Sultans of Ngayogyakarta (G. J. Resink)

A Princess from Sunda: Some Aspects of Nyai Roro Kidul (R. Wessing)

Dewi Sri in Village Garb: Fertility, Myth, and Ritual in Northeast Java (R. Heringa)

Beru Dayang : The Concept of Female Spirits and the Movement of Fertility in Karo Batak Culture (B. Van der Goes)

## BOOK REVIEWS

## ◆ VOLUME LVII-1(1998) ◆

## ARTICLES

The Metamorphosis of the Kappa: Transformation of Folklore to Folklorism in Japan (M. D. Foster)

Shashthi's Land: Folk Nursery Rhyme in Abanindranath Tagore's *The Condensed Milk Doll* (S. Sircar)

Rivalry, Reliance, and Resemblance: Siblings as Metaphor for Hindu-Christian Relations in Kerala (C. G. Dempsey)

May You Be Shot With Greasy Bullets: Curse Utterances in Turkish (Ü. Vanci-Osam)

Miao Feng Shan (A. S. Goodrich)

Mon Music for Thai Deaths: Ethnicity and Status in Thai Urban Funerals (D. Wong)

Obituary: Chen Wulou

## BOOK REVIEWS

## ◆ VOLUME LVII-2(1998) ◆

*Kejadian Manusia: An 'histoire' of Malay / Semai Culture Contact* (F. Rawski and Derus Knoon Ngah)

*To Be or Not to Be ...: The Cultural Identity of the Jawi (Thailand)* (P. Le Roux)

*Fasts, Feasts, and the Slovenly Woman: Strategies of Resistance Among North Indian Potter Women* (N. Caughran)

*'Sōngha Sindang ' : The Tutelary Shrine of T'aeha Village, Ullŭng Island, Korea* (J. H. Grayson)

*Shamanic Dance in Japan: The Choreography of Possession in Kagura Performance* (I. Averbuch)

*The Magicality of the Hyena: Beliefs and Practices in West and South Asia* (J. W. Frembgen)

RESPONSES TO REVIEWS

BOOK REVIEWS

雑誌 *Asian Folklore Studies* の購入等に関するご連絡を下記の所へお願いします。尚、年間の購読料は¥6,000円(団体)と¥3,000円(個人)となっています。

連絡先

〒466-8673 名古屋氏昭和区山里町18

Asian Folklore Studies 編集室

TEL: (052)832-3111(南山大学代表)

FAX: (052)833-6157